

使用依拠的第二言語習得における個人の言語発達プロセスの考察

メタ言語としての母語の果たす機能に着目して

泉 瞳

1. はじめに

認知言語学の使用依拠モデル (Usage-based model) は、言語体系とは具体的言語使用を通して創発すると規定している (Langacker 2000)。また、使用依拠モデルを援用した第二言語習得研究によると、習得は言葉の固まりから始まるとされる (橋本 2018)。民間の英語指導法である B.B.メソッドは、学習開始時から中学3年生レベルの64の英文の絵カード・文字カードを長期にわたり反復して使用し、英文を使用したゲーム活動や、英語読書を通じて大量のインプットを与える。その結果、明示的文法説明を行うことなく、言語使用に基づいてボトムアップ的に英語を習得させる。泉 (2021) は B.B.メソッドが使用依拠モデルを体現した指導法であると考え、第一期観察調査 (2019年6月下旬~2020年2月下旬) を実施し、学習1年目から3年目までの言語習得プロセスに、英語を母語とする子どもの習得と類似する特徴を確認した。本研究では学習者個人の言語知識の長期的変化を明らかにする目的で、1名の学習者を対象として第二期観察調査 (2021年6月上旬~2021年9月中旬) を実施し、学習開始から5年目までの言語知識の長期的な変化を観察し、指導法の特徴である母語 (日本語) 使用と、言語習得の関連を考察した。

2. 研究方法

第一期観察調査時に学習歴3年目クラスに在籍していた Y.S. (当時小4、男児) を対象として、第二期観察調査を実施し、学習5年目の授業内の言語活動を約3週間ごとに合計6回調査し、音声を録音した (うち4回はオンライン zoom 会議システム使用)。録音データから発話や反応を詳細に書き起こし、正確を期すため、指導教師に記録内容を確認してもらった。Y.S.の5年間にわたる英語習得状況は、第一期および第二期観察調査中の発話データ、作文、文構造の理解状況、読書用教材に基づき判断した。観察期間以外の習得状況については、保存されていた作文、3コマ漫画および、教師から聞き取った内容を判断材料として考察した。

表1 観察対象児 Y.S.の学習開始時期と観察期間

観察対象児	学習開始時期	第一期観察調査	第二期観察調査
Y.S.(2009年9月生、男児)	2017年5月 7歳7ヶ月 (小2)	2019年7月12日~2020年2月21日 (小4), 1回/週 合計24回	2021年6月1日~2021年9月14日 (小6), 1回/3週 合計6回 (zoom4回)

3. 結果と考察

Y.S.の5年にわたる長期的な言語知識の変化を、発達のタイプにより次の3つに分類し考察した。

(1) 文法的規則性: Y.S.は英文を一つの「言葉の固まり」と認識し、2ヶ月程度で英語らしく発話できて意味がわかるようになった。教師が日本語をメタ言語として、英文中の主語に焦点を当てた言い換えをさせ、英文を「主語」+「動詞チャンク(動詞句)」の2つに分節できるようになった。続いて英文中の目的語、補語など多様なスロットに焦点を当てて言い換えを繰り返すことにより、学習歴10ヶ月ごろには、各スロットに入る語彙カテゴリーが経験的にわかるようになり、目的語、補語を理解した。3年目からは、言語使用に基づき感覚的に理解していた文法知識を、英文を色分けして整理させ、各統語カテゴリーを明示的に理解した。また学習開始時から動詞の活用形を「おまじない」と称して暗唱させ、手続き的知識として定着させることにより、学習5年目には、時制を理解することができた。

(2) 読むこと (文字と音): 64の英文を英語らしい音声で発話でき、意味がわかるようになると、64英文の文字カードをゲームに少しずつ混ぜて使用した。2年目からは文字カードの文字列と、既知の英文の音声を対応させることで、語彙と音声が一致するようになり、カードの英文を読めるようになった。また2年目からは日本語をメタ言語として意味を把握させる方法で、短いストーリーを読み始めた (以降、「メタ言語補助付き読書」とする)。3年目から簡単な英文で構成された400語程度の物語を読み、初見の英文でも類推して読めるようになった。4年目以降もメタ言語補助付き読書を継続し、5年目になると同様の方法で英検4級から3級試験程度の内容の長文を読むことができた。メタ言語補助付き読書による指導は、新たな語彙や表現を文脈の中で理解させることにより、豊富なインプットを可能としていた。フォニックス知識の指導は3年目から行い、すでに定着した64の英文の音声に基づいて、子音、母音等の種類により段階的に整理した。

(3) 産出 (作文/発話): 学習開始から5ヶ月ごろには英文の固まりから主語を分節できるようになり、6ヶ月で2つの英文の主語を入れ替えて合体させて、最初の「合体作文」を作った。学習3年目になると、3つ

の英文から自分で適切な語彙を選んで作文できるようになったことから、動詞チャンクや修飾句のスロットに入る語彙の κατηγοリーを理解していたと考えられる。4年目になると、4つの英文から、型となる構文と語彙を適切に選択して、ストーリー性のある3コマ漫画を作った。Y.S.は異なる2つの表現を組み合わせて、新たな表現を産出しており、自由作文の段階に移行しつつあった。さらに5年目になると、教師が適切な補助をする「足場掛け」により、口頭で即座に自由産出する様子が見られ、徐々に手本となる64の英文から離れて、自分が表現したい内容を英語で産出するようになった。第二期観察の終了以降の2021年10月からは、時間をかけず自由に英語を産出するようになっており、抽象的構文スキーマが暗示的知識として定着したと考えられる。

図1. Y.S.の習得状況の長期的変化

学習歴	読むこと (文字と音)	産出 (作文/発話)	文法的規則性
1年目 小2 2017.5~	英文を英語らしく言える 英文の意味がわかる 文字カード導入	合体作文 (絵カード2枚, 主語入替え)	動詞の活用「おまじない」導入 主語+動詞チャンクに切り分けられる
2年目 小3 2018.4~	文字カードで遊ぶ メタ言語(日本語)補助付き読書 (レベル1)短文(100語前後)	修飾句をつけて英文を言う 合体作文(2~3枚から)	動詞チャンクスロットの入れ替え (動詞表現に習熟)
3年目 小4 2019.4~	フォニックス/子音 メタ言語(日本語)補助付き読書 (レベル2)(100~400語程度) 類推して英文を読む	合体作文(2~4枚から) 自分で語彙を選んで作る	文字カード主語・動詞に線引き 修飾句スロットの入れ替え 時制と「おまじない」の関係に気づく
4年目 小5 2020.4~	フォニックス/母音 メタ言語(日本語)補助付き読書 (レベル3)	3コマ漫画で 自己表現	目的語・補語・修飾句に線引き (4~5年目にかけて)
5年目 小6 2021.4~	フォニックス/その他の音 メタ言語(日本語)補助付き読書 (レベル4) 英検4級・3級の長文を読む	カードの表現を使って 口頭で産出を始める 自由作文へ	統語カテゴリーを理解 時制を理解 文構造をほぼ理解

4. 結論

使用依拠的指導法であるB.B.メソッドでは、「言葉の固まり」である英文の「音声」から学習を開始し、英文を英語らしいイントネーションで言えて、おおよその意味を理解できた時点を英語習得の出発点とする。Y.S.は、「意味がわかる英文」を、まず主語と動詞チャンク(動詞句)に切り分けられるようになり、続いて主語を入れ替えた作文を産出できており、「読む」、「産出」、「文法的規則性の理解」の能力は、相互に有機的に関連しながら発達することがわかった。また、言語使用に依拠して習得を進めるためには、豊富なインプットが不可欠であるが、Y.S.が64の英文を反復して使用し、さらに日本語の補助付きで大量の読書を行うことにより、ボトムアップのプロセスで英語の規則性を理解し、英語を産出できるようになることが確認できた。

また、指導では基本的に明示的な文法説明は行わず、日本語を使用して英語を理解させる点に特徴があった。指導者は学習者の母語(日本語)を「メタ言語」として、英語の固まりを切り分けさせ、学習者自らが日本語と英語を対比させることにより、元となる英文の意味を拠り所として文法的規則性を理解するように働きかけていた。年少者が第二言語を理解するためには、母語の知識を使うのが最も効率が良いとされており(Cook 2010)、使用依拠的指導においても、母語(日本語)使用は有効であると考えられる。

参考文献

- Cook, G. (2010) *Translation in language teaching*, Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, R. W. (2000) A dynamic usage-based model, In M.Barlow & S. Kemmer (Eds.), *Usage-based Models of Language*, pp. 1-63, Stanford: CSLI Publication.
- 泉 瞳 (2021) 「使用依拠モデルに基づく第二言語指導の実証的研究：母語習得プロセスとの比較の観点から」、北海道大学大学院文学院修士論文。
- 橋本ゆかり (2018) 『用法基盤モデルから辿る第一・第二言語の習得段階 -スロット付きスキーマ合成仮説が示す日本語の文法-』, 風間書房。